

釣りと船づくり

昨今は、国民総余暇時代の到来といわれ、今年も待望の大型連休がやってくる。レジャーを過ごす方法は様々あるが、私は子供の頃から那珂川の下流に育ったので、この川と係わりのある船釣りが大好きだ。釣りは気軽に出かけ竿をおろし、魚信を待つ。この心境は格別なものである。いつも那珂川や濁沼川に出かけるがこの川の合流点では、ハゼ・ボラ・セイゴ・カイズ等それぞれ四季を通じて楽しむことができる。しかしこれらの釣りは、船頭付の仕立船で毎回出かけるにはかなりの経費もかさむ。子供の頃からの夢で自分の持船がほしかった。この想いが募りとうとう自分で手造りの船を造ろうと決心した。この時の想い出話を綴ってみることにする。

今からちょうど8年前になるが、当時職場で手造りのヨット作りに挑戦していた上司がいたので師匠として指導を受けることになった。常識的には船は船大工でないといけないとされているものを、素人が挑戦するのは大変な事だ。家族からは『お父さんは今までに風呂のスノコぐらいしか造ったことがないのに船など造れるはずがない。造っても誰も乗らない。』などと笑われたものだ。しかし造りたい一心と“人間やっぺできない事はない。”というチャレンジ精神で大工道具やベニヤ板などの材料揃えをして準備に取りかかった。まずお師匠さんの指導のもと、船の規模は海へも乗り出せるよう長さ5メートル、幅1.5メートル程度のモーターボート風の設計を描き製作に入った。団地住いの小さな庭に造船所と同じように船台を設け、船底を上に向けた格好でフレーム(肋骨)づくりに入ったのが、8月も半ば過ぎの残暑の厳しい日曜であった。作業は主に退勤後のわずかな時間と土曜・日曜を利用しての作業で、遅々として進まない。11月の木枯しの吹く頃になってようやく骨組みができ船らしくなってきた。この頃になって、家内や子供達もこれは本物になると興味を示し手伝ってくれるようになる。船づくりの最大のポイントは船首の部分で、微妙な曲線を合板材で曲げ取付ける事に苦心したものだ。造船所ではスチームで曲げることにヒントを得て、合板材を風呂で煮て曲げたりした。このほかFRP(合成樹脂材)の貼りつけも屋外のため湿気に気配りしたり、研磨の粉塵飛散で近所から苦情をいわれたりして、途中で何度かなげだそうと思った事もあった。甲板を貼り、装備品をつける頃には、正月も過ぎ早春の日射しに変っていた。エンジン以外の装備品はすべて廃物利用をすることにした。ハンドルは解体屋で、風防はアルミサッシの利用など工夫して装備したことも得意としているところである。最後の塗装工程に入る頃には、



筆者と愛船Fuji号

近所の人や友人達も応援にかけつけてくれ、作業も大詰めになってきた。この頃噂が広まりNHKから関東ネットワーク番組としてテレビ取材の話があり、進水式の1週間前はリハーサルの打合せで忙しかった。10ヶ月に及ぶ造船作業の集大成をNHKのテレビ電波で放映されることはこの上ない光栄であった。風薫る五月晴れの吉日を進水式の日と定め、親戚や近所の人々がお祝にかけつけてくれたなかで、船首の両舷に“Fuji号.”とネーミングした時は、これとようやく念願が叶ってオーナーになった喜びにひたりながらインタビューに答えていた。トラックで近くの那珂川まで搬出し、安全祈願の清めをし進水した。一斉に拍手が湧く中お師匠さんと思わず固い握手をした。心配した侵水や傾きもなく、白地にブルーラインの入った船体の雄姿が新緑に映えていた。新品の25馬力エンジンを始動するとエンジン音も軽やかに白波を切って順調に滑り出した。その後姿をいつまでもテレビカメラのレンズが追いつけていた……。

この日の感動が今でも目に浮かぶ。趣味の船づくりとはいえよくやったものだ。この船づくりを通じ何事も辛抱強く最後まで成し遂げることや物を創造する喜びを子供達に伝授することができたこと、そして親子のコミュニケーションがはかれたことは何よりも貴重な体験だった。今では家族揃っての水上ハイキングや魚釣りが、我家のレジャーのメインになっている。今年も桜の開花と共に水ぬるむ魚釣りの季節がやって来た。

(勝田市企画部企画課長 深沢 仁)

